

まんだら通信

第169号 (通巻201号)

平成22年(2010)07月 佛誕2576年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



6月12日ふれあいコンサート

白辛子の夕ネ

インドは暑い国という思いがあるためか、梅雨が明けて日差しが強くなると、インドのあれこれの思い出が湧きます。
お釈迦さまは、悩み事があれば国王や大臣が自分の方から教えを受けに来るような、それはそれは尊敬される方でしたが、そんな身分にもかかわらず、頼まれれば遊女や鍛冶屋、家畜の屠殺で暮らしを立てている、そんな身分の低い人のところへも気軽ににお出かけになりました。
その頃、ある村にお瘦せのゴータミーという若いお嫁さんがいました。
待ちに待った赤ん坊が産まれ、日増しに可愛さが増して、家族みんなが幸せいっぱいだったある日、たった一日の病気でその子が亡くなってしまいました。
幼い子どもはどこの国でもみんな可愛

いのですが、インドやスリランカの小さい子は、目が大きく二重まぶたで、アイシャドウをしていたり、殊の外に可愛いですね。
気が動転して半狂乱になったゴータミーは、暑い日差しの中を死んだ我が子を抱きかかえながら「だれか、この子を生き返らせて下さい」と村中を走り回りました。
突然、我が子を取った母親の気持ちは、自分の身に引き換えて分かる気がします。
鬼子母神は、夜叉パンチーカの妻で千人の我が子がいながら、他人の子を食べべたため、彼女が一番可愛がついてる末っ子のピンガラを、お釈迦さまが神通力で隠してしまいました。
子を失う苦しみを感じた鬼子母神は、悔い改めて仏教の守護神になった、という話があります。
お瘦せのゴータミーも、他人の説得を聞き入れる状態ではありませんでした。
見るに見かねた村の長老が、丁度村外れに滞在中のお釈迦さまを訪ねて、お願いするようにと教えてやりました。
訴えを聞いたお釈迦さまは、
「安心しなさいゴータミーよ。そなたの願いはきつとかなうだろう。生返りの薬を作るため、今まで死人を出したことがない家から、白辛子の夕ネを少し分けてもらってきなさい。」
と教えました。
でも、そんな家があるはずはありません。人は遅かれ早かれ必ず死ぬ、ということを感じたゴータミーは、「世尊よ、有難うございました。もう生返りの薬は要らなくなりました。もつと深く人生の意味を理解するために修行したいと思えます。」

どうぞ私をお弟子にしてください。」とお願ひして教団に入り、やがて長老尼と尊敬されるようになったということです。
彼女の悟りの境地を詠んだ詩は、原典の長老尼偈(テリー・ガーター)の中に二千五百年過ぎた今も残っており、
生まれながら死ぬのは当たり前じゃん、と誰もが言います。
でも、十人が十人自分がそうだった時のことを、本気で思えば思うほど、親しい人との別れが辛いとか、蓄えた財産の行く末などを思つてジタバタします。
私もご多分に漏れず、うろたえると思えます。できればそうなりたくないのです。その日その日をせめて丁寧な生きたいと努めています。
ところでキサーゴータミーは、最愛の我が子に先立たれるという大きな不幸が原因で、悟りという最高の幸せを手に入れることが出来ました。
私自身、平凡な人生を過ごしてきたと言つて良いと思いますが、それでもこの先どうなるのだろうかという時がなかったわけではありません。
キサーゴータミー長老尼ほどの劇的なことはありませんが、なんとかやり過ぎた今、振り返るとそういうことがあったから今があるのだと、つくづくそう思えます。
その時は分からないだけで、時が経てばどんなことでも人生の肥やしになるんだと。
『人生至るところ青山あり。』という、昔からの言葉は矢張り本当だと、あらためて思うこのごろです。

◆夏至を過ぎました。これからは少しずつ日脚が短くなります。
◆ホームページには載せたのですが『まんだら通信』は発行日の関係で、先月号でお知らせできなかった『ふれあいコンサート』が、去る6月12日土曜日6時半から行われました。その様子は市の広報誌『広報みなみぼうそう』7月号15ページ『まちの話題 こんなことがありました』に『ジャズのリズムに酔いしれる』として掲載されました。◆今回の選挙には公約にも載せていませんが永住外国人への地方参政権、選択的夫婦別姓、そして人権侵害救済機関設置法案と、いかにも良いことづくめに見える法案が出番を待っています

が、国を売るような危険な法案です。パソコンを持っている人なら常識ですが、新聞テレビは言いません。民主党が過半数をとれば、「日本沈没」が一気に進むことを覚悟しなければなりません。
◆75年余生生きて来ると、いつ何時、何が起きるか分からないという気持ちになります。
たとえ体は元気でも、頭の“配線”がおかしくなればそれまで。既に物忘れがどんどん進んでいるのが、自分でも分かりますから、で、忘れないうちにずっと先の孫や子のために、遺言を書き始めました。
これといって大した理由がある

わけではないのですが、何十年か何百年か先の子孫が「へえ、こういう人がいたんだね」と読んでくれたら面白いのではないかと、という程度のことです。パソコンに教えておけば、いつでも世界中から読むことが出来ますから。◆今月の野草は、6月16日撮影のイワタバコ【いわたばこ科イワタバコ属】です。生えているところは、白浜で一ヶ所しか知りません。そのくらい数少ない野草です。花茎の丈は15センチぐらい。葉の形がタバコのそれに似ているからこの名前がついたと、原色牧野植物大図鑑にあります。
2010.07.09 龍渉



余滴

につぼん人情小噺

三遊亭鳳豊

第五十五話 白秋

人生は、青春、朱夏、白秋、玄冬の四つの季節に分かれるそうですね。

「私が神だったら、人生の最後に青春を置いたであろう」と言った人がいたそうですが、

まさにそうですね。青春時代って、一番いい時代ですが、また一方では時間と夢はあるのに、お金がない、無尽蔵だと思われたあの「若さ」と何も怖くなかった「勇氣」がいまあれば、と思いますけどねえ。

そういえば、私も若い頃、よく恋をしては、振られました。惚れた数から振られた数を引けば女房が残るだけ……。いやー、お恥ずかしい。でも、いま逢えば、私を振った女性も振り返ってくれるのではないか、なんて思っていますけどね。LOVE AGAINという言葉がいま流行っているのも、そんなところから生まれたのではないかと思いますが……。

今日は、仙台で見つけた七十代の女性のそんな思いを綴った文章を、そのまま紹介します。

人生の晩秋に 氏家みち子

妹の夫、典孝の一周期の法要の席で、私は守さんに再会した。守さんは四歳上の長兄と同級生だから、今年、七十八歳になるはずだ。ごま塩の髪で背筋はしっかりと伸びていたが、足が少々おぼつかなく、和室の座布団に両

足を組みながら、危なげに尻をおろした。

私は「何年ぶりだろう？」と数えながら、素知らぬ顔をして隣に座った。僧侶の読経のあと、香炉がまわつてきて、守さんから私に渡されたが、頭を軽く下げて受け取っただけで、顔を見なかった。私のことを覚えていないのかとも思った。

法要の諸事がすむと、席の向きを替えて、お膳が運ばれてきた。皆の前にお膳が揃うと、長兄が立ちあがった。

「本日はお忙しいなか、義弟の一周忌に参集くださいましてありがとうございます。妹もどうか落ちついておられますが、寂しさは日に日に募ることを思います。どうか、皆さん、義弟を偲ぶと同時に妹のこともよろしくお願ひします。それでは献杯をしたいと思います。」

長兄がそう告げると、隣りの守さんが私に杯を持つように促し、お酒を注いでくれた。

私も真面目な顔をして、守さんの盃に酒を注いだ。「典孝さんの霊に献杯」、兄は大きな声で位牌と遺影に向かつて杯を上げた。

長兄と守さんは海兵時代の親友で、復員するとふたりは仙台一中に通った

昭和二十二年二月、私たち一家が中国から父の生家の岩沼に引き上げてきたその夕方、学校帰りに守さんは、長兄の家に寄り、家族に挨拶してくれた。

次の日、父に連れられて宮城県教育委員会に行った。

次兄は仙台一高二年生に、私は常盤木学園中学三年生に決まった。常盤木に行くことになったと長兄に言うのと、「守君のいいなすけも常盤木だから、友だちになれるね」と言った。翌日、転入すると、「マモちゃんから聞いたよ。一緒にあばい（帰ろう）」と丸い顔にほっぺを赤くして、トシコさんが寄ってきた。

ある日、私は仙台に用事があつて、山道を登っていた途中で、坂を下ってきた守さんに出会った。

「兄上様、ご在宅でしょうか？」

最上級の敬語を使った言葉にドギマギしながら、近所の農家の離れで受験勉強をはじめた長兄の居所を教え、異性から声をかけられた最初で、長い間、守さんのこの言葉が忘れられなかった。好感を持ったが、いいなすけがいるのだからと自分にいい聞かせた。宴会の席で守さんが私に話しかけてきた。

「トシコはかわいいそうなんだったよ。早くに両親をなくして、伯父の家で育てられ、嫁ぎ先でも不幸があつてね」「守さんのいいなすけでなかったの？」

「いや、僕も伯父の世話になつたけど、その気はなかったよ」

どうです。いい話でしょう。

私はこの話のある女性にしました。彼女はあまり感激してくれませんが、「なんで最初に友だちになつたトシコさんに、『あんた、守さんの婚約者なんだって?』って、すぐ聞かなかつたんだろう。ダメじゃん。だって、ふた

りには、守さんしか共通する話題がないんだもの。そうしたら、すぐにちがうってわかつたのに。わかつたら、私なら猛アタック、好きになつたらすぐ子供をつくることよ。いま、私の子は三歳」そんなこと聞いてない。でも、そんな彼女の隣りにいた紳士が、こう言いました。

「いや、そうじゃないね。いいなすけがいるって言ったのは長兄だろ。きつと、自分の妹が守君を好きなことを感じていて、うまくいけばいいけど、もし、うまくいかない友情にヒビが入るから、好きにならないようにそう言ったんだよ。同級生なら、守さんには好きな女性がいることぐらい聞いてるし」

たしかに世の中には、知らなかつたからよかつた、ということだつてありますよね。

好きになつたら子供をすぐに、というのも少子化が進むこの時代はいいですけど、「ひよつとしたら、この人と結ばれたかもしれない……」という、ほんわかかな気持ちは大切だと思うんですが、ごさいますよ。

うーん、やつぱり、青春は人生の最後にあるべきだ！ なに言ってるんだか。

月刊誌MOKU連載、三遊亭鳳豊師匠の「エッセーです。」生きる意味を深耕する月刊誌」と表紙にあるように、大向こう受けを全く考えない、本当にそうだよなあと、ヒザをたたくような記事が毎号載っています。噛めばかむほど味がでる、名人が干したすめのような雑誌です。今月号は私が一番信頼している曾野綾子さんの対談です。曰く「人間は与えてこそ人間になる」と。まさにわが意を得たりの気持ちです。